いち押しBOOKS

GOTH(ゴス) リストカット事件

乙一著(角川書店　2002.7)

初めにお断りするが、この作品は誰にでもお薦めできる作品ではない。読んで気分を害する人もいるだろう。

GOTHとはGOTHICの略。猟奇的な人間の暗黒面に惹かれるもの達の総称。主人公の「僕」という少年と「森野」という少女。彼らはGOTHだ。ふとしたことから普通という名の仮面の下に隠された互いのGOTHに惹かれ共鳴しあった二人だ。二人は求めて止まない。普通ではない血生臭く猟奇的なモノを。彼らは引き寄せられるかの如く事件に遭遇していく。彼らが遭遇する猟奇的な事件は、どこか物悲しさや切なさを孕んでいる様に感じられた。一般的な「普通」の視点からは常軌を逸している。どこにそんな物悲しさ、ましてや猟奇的事件のどこに切なさなどという感情を持つのか、と疑問に思うだろう。主人公二人以外の登場人物の目線から書かれているためか、ただ恐い話、残酷でグロテスクな話というだけではなく、恐さや残酷さや奇妙な関係の中にも、切なさや優しさもそして悲しさを感じられるのだ。そこが乙一氏の作品の魅力のひとつだ。視点の在り方、展開の仕方が巧妙なのだ。読み進むにつれ、共感することはないGOTHの持つ世界に引き込まれている自分に気づいた。一瞬、自分自身もGOTHの部分を持ち合わせているのではないか、という錯覚に捕らわれてしまった。

本書に収められている6つの短編はそれぞれ別々の話ではあるのだが読み進んでいくうちに一本につながってくる。初めは、作品の暗さグロテスクさに読むのをやめてしまうかもしれない。だが、ひとつひとつの作品に張られた伏線、六つの作品に一貫して張られている伏線が読了後に判明した際、読後感を何とも言えないものにさせる。作品に垣間見られる主人公らの関係の微妙な変化も面白い。本書を手に取りGOTHの世界を知った貴方は主人公らと同じGOTHですか?それとも違いますか?

最後に、全て読了した人はこの本のカバーを取り外してみることをお薦めしよう。面白い仕掛けがあるのだ。

(文化学部日本語日本文化学科　高橋佳那)

自著紹介

事業創造のビジネスシステム

小川正博編著(中央経済社 2003.4)

本書は、ビジネス開発という視点から中小企業経営を検討したものである。新しい製品や技術は開発されるものの、収益を計上できる事業として成功する例が少ない。これを打開するにはどうするか、というのが本書の問題意識である。

技術的にどんなに優れた製品やサービスでも、それが顧客の求めるものであり、顧客の求める条件で生産し、顧客の購入しやすい方法で提供しなくては需要を獲得できない。しかし、このことが忘れられ、新新な製品や技術を開発すれば、それで需要が創出できるという前提で開発が行われている。事業の仕組み全体で顧客を獲得するのであり、製品やサービスの開発だけでなく、新しいビジネスシステムを創造することが今日の課題である。

このような基本的な問題意識を元に中小企業が再生し、再び成長軌道に乗っていくためのビジネス開発についてさまざまな角度から検討し、問題提起した。また、本書では企業経営には組織内部の能力が重要であり、またそれが持続的な競争優位の源泉であるというリソースト・ベースト・ビュー(Resource Based View)の概念を取り入れている。

(336.1−024)